

ご挨拶

北海道英語教育学会
会長 中村 香恵子
北海道科学大学

北海道英語教育学会 第19回研究大会開催にあたって

先日の北海道胆振東部地震により被災・避難された皆さまに心よりお見舞い申し上げます。被害にあわれた地域の皆様の、一日も早い復興をお祈り致します。

未だ復興への取り組みが続いている中、多くの方々のご支援とご協力により、第19回研究大会を開催できますこと、役員一同、心より感謝いたします。

本学会は、北海道の英語教育の推進に資することを目標に、様々な活動に取り組んでおります。特にここ数年は「現場に根差した研究」をスローガンに、会員相互の研究と教育実践の発展を目指した活動を展開しております。今回の研究大会は、研究発表3本、実践報告3本、本学会のSIGによるワークショップ2本というバランスのとれた発表内容となりました。またその内容も、語彙や特定の文法項目の習得に焦点を当てた研究発表、自作教材、マルチメディアやコースウェアを活用した授業実践報告、そして無料のクラウドサービスの活用法や研究方法や論文のまとめ方に関するワークショップと多岐にわたっており、多様な研究分野における最新の知見やアイディアに触れることができるものとなっております。

さらに本年度は講演講師として、かねてからお話を伺いたいという希望の声が多かった、もと本学会のメンバーでもあり、第二言語習得研究分野の第一人者でいらっしゃる、明治大学教授 廣森友人先生をお招きいたしました。廣森先生からは、第二言語習得のプロセスやメカニズムとそれに基づいたより効果的な第二言語学習の在り方についてご講演をいただき、まさに研究と教育実践の両面から多くを学ばせていただけるものと確信しております。

最後に、本大会開催にあたり、ご協力をいただきました北海学園大学様、協賛企業様、会員の皆様、そして参加者の方々に深く御礼申し上げます。

会場のご案内

<p><開会行事・総会> D30 教室 (3F)</p> <p><第1会場> D30 教室 (3F)</p> <p><第2会場> D40 教室 (4F)</p> <p><第3会場> D41 教室 (4F)</p> <p><第4会場> コンピューター実習室 E (6F)</p> <p><講演会会場> D30 教室 (3F)</p>	<p><閉会行事会場> D30 教室 (3F)</p> <p><展示会場> 3階廊下</p>
---	--

日 程

時 間	内 容	発表番号	教 室
12:00-12:30	受付 展示見学		受付：7号館3階エレベーター前 展示：3階ホール・廊下
12:30-12:50	開会・総会		D30 教室
12:50-13:10	移動・休憩・展示見学		3階ホール・廊下
13:10-14:10	SIG 企画	①	D30 教室(第1会場)
		②	コンピューターE (第4会場)
14:10-14:30	休憩・展示見学		3ホール・廊下
14:30-15:30	研究発表・実践報告	③ / ⑥	D30 教室(第1会場)
		④ / ⑦	D40 教室(第2会場)
		⑤ / ⑧	D41 教室(第3会場)
15:30-15:50	休憩・展示見学		3階ホール・廊下
15:50-17:20	特別講演	廣森 友人 先生	D30 教室
17:20-17:40	質疑応答		
17:40-17:50	閉会		D30 教室
18:30-20:30	懇親会		ライブシュパイゼ (南2西3)

研究発表者

【SIG 企画】 13:10-14:10

第1会場 D30 (3F)	① 北海道英語教育学会 Speaking SIG 志村 昭暢 (北海道教育大学)・小山 友花里 (留萌市立留萌中学校)・臼田 悦之 (函館工業高等専門学校)・山下 純一 (函館工業高等専門学校)・中村 洋 (ニセコ町立ニセコ中学校)・酒井優子 (東海大学)・河上 昌志 (札幌市立北都中学校)・照山 秀一 (石狩市教育委員会) 「英語教育における実践研究の方法」
第4会場 コン E (6F)	② 北海道英語教育学会 E-learning SIG 三ツ木 真実 (北海道文教大学)・Knoepfler Christopher (北海道教育大学)・青木 千加子 (北海学園大学)・藤井聡美 (北海道大学)・石塚 博規 (北海道教育大学)・Kibler Ronald (苫小牧駒澤大学)・中村 香恵子 (北海道科学大学)・尾田 智彦 (札幌大学) 「授業内における Google フォームの実践的使用について」

【研究発表・実践報告】 14:30-15:00

第1会場 D30 (3F)	③ Ivy Chu-Hui Lin “Foster English digital literacies through digital storytelling”
第2会場 D40 (4F)	④ Tomoya Tanabe “Implicit knowledge of collocations in connectionist psycholinguistics”
第3会場 D41 (4F)	⑤ 上原 岳 「関係代名詞の3要素を習得させるための指導法の分析」

【研究発表・実践報告】 15:00-15:30

第1会場 D30 (3F)	⑥ Goh Kawai “CLIL and STEAM courseware design based on the USA amateur radio license tests”
第2会場 D40 (4F)	⑦ 金山 幸平・笠原 究 「拡張分散学習は均等分散学習より語彙学習に効果的か」
第3会場 D41 (4F)	⑧ 岩松 恵 「笑顔と英語で釧路の観光振興」

発表要旨

①13:10-14:10 (第1会場 D30)

SIG 企画 (60分)	北海道英語教育学会 Speaking SIG 志村 昭暢 (北海道教育大学)・小山 友花里 (留萌市立留萌中学校)・臼田 悦之 (函館工業高等専門学校)・山下 純一 (函館工業高等専門学校)・中村 洋 (ニセコ町立ニセコ中学校)・酒井優子 (東海大学)・河上 昌志 (札幌市立北都中学校)・照山 秀一 (石狩市教育委員会)
-----------------	---

英語教育における実践研究の方法

近年、多くの英語教育系の学会において、実践研究の重要性が指摘されている。HELES としても、HELES Journal において、教育実践にもとづく知見を報告する「実践研究の部」が設けられている。しかし、実践研究の論文投稿や採択は多いとは言えない。その一因として、実践研究の方法や論文へのまとめ方があまり知られていない可能性があると考えられる。本発表では、これまで北海道英語教育学会 Speaking SIG が行ってきた、タスク性判断基準 (臼田他, 2014) に基づいた、中学校英語教科書に対応したコミュニケーションタスクの開発と検証についての実践研究を例に、その研究方法、特にデータ分析の方法や論文へのまとめ方について提案する。

②13:10-14:10 (第4会場コンピューター実習室 E)

SIG 企画 (60分)	北海道英語教育学会 E-learning SIG 三ツ木 真実 (北海道文教大学)・Knoepfler Christopher (北海道教育大学)・青木 千加子 (北海学園大学)・藤井聡美 (北海道大学)・石塚 博規 (北海道教育大学)・Kibler Ronald (苫小牧駒澤大学)・中村 香恵子 (北海道科学大学)・尾田 智彦 (札幌大学)
-----------------	--

授業内における Google フォームの実践的使用について

HELES e ラーニング SIG では、e ラーニング・システムの効果的な活用や英語教育に役立つサイトなどについて、月例の研究会において実践例や様々な情報を紹介する形で交流を行っている。本発表では、その交流活動の中で取り上げられた、『Google フォーム』の授業での効果的な使用方法と実践例について紹介し、実際に PC を使用してワークショップを実施する。内容は2部構成で、1部は「Google フォームを使ったクイズページ作成方法」、2部は「クイズの成績結果とフィードバックの方法」を具体的に取り上げる。どちらも、Google フォームの扱い方のみではなく、実践的にどのように授業への応用が可能かについても触れる。

※PC をご持参いただいていない方の参加も可能です。

③14:30-15:00 (第1会場 D30)

実践報告	Ivy Chu-Hui Lin (Hokkaido Gakuen University /Sapporo Gakuin University)
Foster English digital literacies through digital storytelling	
<p>Digital storytelling (DST) is a project-based activity utilizing multimedia such as images, music, video, recorded audio to complete a given task (Lambert, 2006). In language learning settings, DST is claimed to be beneficial to learners' multimedia literacies (Castaneda, 2013). Evidences also show that DST promotes learners' critical thinking, oral skills and learning motivation (Yan & Wu, 2012, Tahriri et al., 2015). Digital literacies indicate a set of critical thinking skills that allow language learners to communicate through the uses of technologies and the internet (Dudeny et al., 2012). I adopted DST where a group of lower-intermediate EFL learners were asked to combine visual images and audio files to produce an introductory video about a city in Hokkaido.</p> <p>In this presentation, I will report the reflections from both the teacher and the learners and discuss the challenges and potential benefits of DST to English language learners' development of English digital literacies.</p>	

④14:30-15:00 (第2会場 D40)

研究発表	Tomoya Tanabe (Hokusei Gakuen University)
Implicit knowledge of collocations in connectionist psycholinguistics	
<p>Within the backdrop of usage-based theories of language, a body of research shows that formulaic language is learned implicitly through chunking; the development of associative connections between objects in the long-term memory. While previous findings suggest that exposure is one way to learn explicit knowledge of formulaic language, the process of developing implicit knowledge of formulaic language in second language acquisition has not been fully understood. Extending previous work by Durrant and Schmitt (2010), the study approaches this issue using a priming paradigm (stem completion task) and investigates whether implicit knowledge of collocations is formed through two exposures. Results suggested, however, that implicit memory of the collocations was not formed through two exposures. Based on these findings, the study concludes by discussing possible differences in the mechanisms of chunking in first language versus second language acquisition, and suggests avenues for future research.</p>	

⑤14:30-15:00 (第3会場 D41)

研究発表	上原 岳 (専修大学大学院)
関係代名詞の3要素を習得させるための指導法の分析	
<p>コミュニケーション能力を育成するためには、目標文法項目の形式・意味・機能の3要素を指導する必要がある。しかし従来の英語教育では、これら3要素のうち形式と意味の指導が重視され、目標文法項目が実際のコミュニケーションの中でどのような役割を果たすのか(機能)についての指導はあまり行われてこなかった。そこで本研究では、自由英作文テストで得られた結果に基づき、どのようにコミュニケーション活動を行えば効果的に目標文法項目の機能を指導することができ、3要素を習得させることが可能なのかについて考える。分析に際し、関係代名詞を目標文法項目に設定し、その機能を「定義文を用いて、説明や紹介をすること」とする。</p>	

⑥ 15:00-15:30 (第1会場 D30)

実践報告	Goh Kawai (Hokkaido University, Center for Language Learning)
<p>CLIL and STEAM courseware design based on the USA amateur radio license tests</p>	
<p>I am designing CLIL STEAM courseware for a new course for college freshmen. The class is wholly in English. Students prepare for their next class by doing homework assignments online. During class, participants talk using phrases they prepared before coming to class.</p>	
<p>The language material is partly based on American amateur radio license examinations. Amateur radio (also known as ham radio) license exams contain questions on electrical and electronic engineering (such as the Ohm's law), plus questions on rules and regulations (such as radio frequencies that we may transmit). Engineers are professionals who possess knowledge of engineering theory and technology, plus knowledge of legal requirements and practical standards for applying that engineering knowledge. Amateur radio is an example of combining knowledge of technology and regulations that are within reach of many middle school and high school students.</p>	
<p>In my talk, I will demonstrate courseware to show how online assignments train skimming and explaining (i.e., finding and describing core concepts from text and graphics).</p>	

⑦ 15:00-15:30 (第2会場 D40)

研究発表	金山 幸平 (札幌大谷中学校・高等学校)・笠原 究 (北海道教育大学)
<p>拡張分散学習は均等分散学習より語彙学習に効果的か</p>	
<p>本研究の目的は、どのような分散学習がより効果的なのかを検証することである。理論的には、最初の復習のタイミングを早め徐々にその間隔を広げていく拡張分散学習(Expanding Spacing)が効果的であると信じられてきたが、最近では常に一定の間隔で復習を行う均等分散学習(Equal Spacing)と呼ばれる学習方法と比較しても有意差がないという報告が多数存在している。本研究では先行研究の問題点を指摘し、再度実験を行った。高校2年生を対象に40語の日本語と英語のペア学習を拡張分散グループ(Days 1, 3, 10, 22)と均等分散学習グループ(Days 1, 8, 15, 22)に分けてそれぞれの日程で学習を行い、35日後に遅延テストを行った。その結果わずかではあるが拡張分散学習が均等分散学習より効果的であることが示唆された(38% vs. 25%)。</p>	

⑧ 15:00-15:30 (第3会場 D41)

実践報告	岩松 恵 (釧路短期大学)
<p>笑顔と英語で釧路の観光振興</p>	
<p>本学の英語実用ゼミの観光振興に関わる活動の紹介です。一つは、釧路国際交流の会とともにクルーズ船外国人観光客のおもてなし。釧路には年間15回以上、海外からクルーズ船が寄港します。ドーム状の施設内で①インタビュー②折り鶴③書道④風呂敷の包み方等を体験してもらう時、ゼミ生が各ブースで英語でお手伝いをします。もう一つは観光ガイドブックの出版と寄贈。Let's say "Hello!" on Nusamai Bridge.を200部出版し、小学校、中学校、高校の他、掲載した商店や公的機関に寄贈しました。市民が簡単な英語で釧路を紹介するための本です。各Webサイトから自由にダウンロードもできます。これらの活動の様子と今後の課題等をご紹介します。</p>	

講 演

第二言語習得における動機づけのメカニズム

講演概要

本発表の目的は、動機づけ研究の観点から、効果的な英語学習・指導のあり方について検討することです。はじめに、第二言語習得における動機づけ研究の位置づけについて、簡単に確認します。その上で、2つの研究アプローチ、具体的には「動機づけ」(motivation)を志向した研究、「動機づける」(motivating)を志向した研究に焦点をあて、それぞれの観点からこれまでの研究で得られた知見を整理します。最後に、そのような知見に基づいた英語学習・指導の実践法について、実際に活動例やデータを挙げながら紹介します。動機づけとはどのような心理現象なのか、動機づけを高め維持するにはどうしたらよいか、自らの学習・指導経験を振り返りながら考える場になればと思っています。

講師紹介

講師紹介： 中村 香恵子（北海道科学大学 教授）

講演講師： 廣森 友人 氏
（明治大学 国際日本学部教授）

演 題： 第二言語習得における動機づけのメカニズム



講師略歴：

明治大学国際日本学部教授。主な専門分野は、第二言語習得の心理学。第二言語（英語）を学ぶにはどのような学習方法が効果的なのか、どうすればやる気は高まるのかといったテーマを理論実証的に研究。主な著書には、『外国語学習者の動機づけを高める理論と実践』（2006年、多賀出版）、『成長する英語学習者：学習者要因と自律学習』（2010年、大修館書店）、『英語学習のメカニズム：第二言語習得研究にもとづく効果的な勉強法』（2015年、大修館書店）、『「学ぶ」・「教える」の観点から考える実践的英語科教育法』（近刊、大修館書店）などがある。

専 門：第二言語習得の心理学

オックスフォード大学出版局株式会社

開隆堂出版株式会社

カシオ計算機株式会社

株式会社アルク

教育出版株式会社

金星堂

啓林館

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

チエル株式会社

(順不同・敬称略)